

秦氏について



国宝登録第1号の弥勒菩薩半跏思惟像（はんかしいぞう）

（ <https://butsuzolink.com/koryuji/> による）

国宝登録第1号の弥勒菩薩半跏思惟像（はんかしいぞう）は広隆寺にまつられている。これは新羅から聖徳太子に送られた仏像である。

日本書紀には聖徳太子から仏像（弥勒菩薩）を譲り受けた秦河勝（はたのかわかつ）が、この仏像をまつるために蜂岡寺を建てたと書かれている。そこで、秦氏のことを深く知るには、まず聖徳太子と秦河勝との関係をまず調べなければならない。

秦河勝は何故聖徳太子に仕えるようになったか？

中国の「隋書」には、日本に秦氏の王国というか秦一族の多く住む一大拠点があったことが記されている。秦一族が大挙日本にやってきて、[香春岳のあたりを足がかりにして](#)、最初拠点としたところは九州の豊前あたりであった。その秦氏が建立したのが[宇佐神宮](#)である。秦一族は絶大な勢力を持っていたことがわかる。その一族は、その後、中央政権にも進出すると同時に、京都を中心として全国各地に進出していく。**聖徳太子は、秦一族の財力と技術を利用するために、その当時の族長・秦河勝を自分の部下として重用するのである。以来、秦河勝は、聖徳太子の側近として調停のために尽くしていく。天皇家に使えている秦氏としては、皇極天皇の元で東国に派遣されたり、天皇家の服属者としての任務を全うしている。**

さて、上に述べた日本書紀の記述であるが、その記述の中に広隆寺という名ではなく鉢岡寺という名があるのは重大である。蜂岡寺は広隆寺の元の名前ではあるが、その場所は今の場所太秦ではなく、京都の北白川にあったのである。このことは秦氏の京都における勢力の広がりを知る上で重要な記述であるので、その点につき、どのような歴史的事実があったのか調べてみる必要がある。

聖徳太子の時代（7世紀の初頭）から桓武天皇の時代（8世紀後半）に150年ほど時代は新しくなるが、桓武天皇の時代、つまり平安時代になるとさまざまな文献が残されているので、日本の歴史は鮮明になってくる。平安時代、内裏（天皇がお住まいになり、業務をなさるところ。俗に御所ともいう）は、現在の御所より相当西にあった。桓武天皇は、母・高野新笠を祀るために、現在の[平野神社](#)を建立された。建立される前には、蜂岡寺があつて、秦氏は蜂岡寺を現在の広隆寺の位置に移転せざるを得なかったようだ。ちなみに、御所も秦氏の土地に造られた。当時、秦氏は伏見稻荷大社のあるところを中心に[深草](#)一帯に土地を持っていたようだ。秦氏は、[下鴨神社](#)にも深く関係しているので、その辺りの土地も秦氏の土地であったかもしれない。当時、秦氏は現在の京都全体に絶大な勢力を張っていたのである。

では、秦一族が京都にやってきた時期は、いつ頃だろうか？

嵐山に有名な堰がある。この堰は一の井堰または葛野堰（かどのせき）」といい、左右岸に用水の取り入れ口がある。取水堰である。その用水路は、現在、松尾大社の前を流れている。もちろん葛野堰ならびに用水路は何度も作り変えられているけれど、最初の堰ならびに用水路はとても古く、秦氏が太秦を本拠地として定住した時に造られたのである。したがって、秦一族が京都にやってきた時期は、おおむね葛野堰が最初に作られた時期と考えて良い。松尾大社と秦氏にまつわるこの一連のことについては、次をご覧ください。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/matuotaisya.pdf>

葛野堰は5世紀の後半だと考えられているので、秦一族は5世紀後半には京都にやってきて、太秦を本拠地として勢力を拡大しながら京都の開発を行ったと考えて良い。それが平安遷都（8世紀後半）につながっていく。

秦一族は、京都「山背の国」に進出するだけではない。上述したように、中央政権にも進出すると同時に、京都を中心として全国各地に進出していくのである。

まず、秦氏が中央政権に進出した動機やその実態はどのようなものであったか、それを知っておかなければ秦氏を知ったことにはならない。秦氏の中央政権進出については、私の論文「邪馬台国と古代史の最新」の第6章に書いたので、それを次に紹介しておく。

応神天皇と秦氏：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/yamatai06.pdf>

そこに述べたように、秦氏の始祖・功満王は、物部氏の全面的な協力を得て、応神天皇の擁立に全精力を傾けるのである。

次に、秦氏が全国各地に進出した状況について述べることにする。まず、白山神社の創建に秦氏が大きく関わっているので、白山神社について述べる。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/hakusanjin.pdf>

しかし、白山神社と秦氏との関わり合いだけを見ていたのでは、秦一族の凄さと言うものがわからない。秦一族の凄さを知るには、歴史を紐解き、秦氏と東国との関係を調べなければならない。秦氏と東国との関係は次のとおりである。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/hatatougou.pdf>

平安時代、桓武天皇の二大政策目標は、平安京の建設と東国の経営であった。そのうち、平安京の建設に秦氏が惜しみなく協力したことはすでに述べた。では、東北経営についてはどうであったのか？

秀真伝（ホツマツタエ）という誠に不思議な書物がある。歴史書でもあり、哲学書でもある。一般には、偽書と言われているが、私は、そうではなくて、実際に慈覚大師が東国の平和を願って書いたものと考えている。その結論は、次のとおりである。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/hotumaketuron.pdf>

秦氏は、桓武天皇の東国経営にも然るべき役割を果たしていく。

秦氏とは、以上縷々述べてきたように、朝廷に惜しみなく協力するとともに、全国各地の養蚕、織物、土木工事、鉱山開発など殖産産業の振興に絶大な貢献をした物凄い一族だったのである。